おねうさ 3
海
ONE USA 3
GLAMOUR WORKS
ADULT ONLY

月野シンゴ

セーラームーンこと月野うさぎの実弟

ある日、たまたま姉から取り上げたブローチから、まばゆい光がほとばしったいかなる偶然か、ブローチの中の銀水晶がシンゴに反応し、姉の目から理性の光を奪ってしまったのだ

その結果、うさぎはシンゴの命令になんでも従う肉人形へと変わってしまう

悪ふざけで全裸になるよう命令したシンゴは黙って命令に従った姉の白い裸身に息を呑み魅せられてしまう……思わず姉弟の一線を超えたシンゴとうさぎ

それからは、肉欲を貪る毎日を送るようになる

銀水晶の力はシンゴに膨大な精力とセーラー戦士にいかなる命令をも強制できる力を与えるが、段々と物足りなさを覚えていく

姉の正体やブローチの力を知ったシンゴは、その性欲の捌け口を姉の友人たちにも向け始める

半年後――シンゴの前には、腹を膨らませた五人の性奴が並んでいた

そしてシンゴは新たな生贄を求めて動き出す……

天王はるか

美しき外部太陽系戦士のひとり、セーラーウラヌスこと天王はるか

シンゴの次のターゲットは彼女だった

学校帰りにシンゴに呼び止められたはるかは、そこで意識を失い気が付くと

どこども知れない地下室に吊り下げられていた

奇怪な力で肉体の自由を奪われたはるかは、それでもシンゴの陵辱に抗い続けた……だがそれこそがシンゴの罠だった

銀水晶の力で、シンゴへの反抗心を抱くたびに性的快感を覚えるように暗示をかけられていたのだ

逃れようのない快楽の蟻地獄でもがき続けるはるか……

そして今日も性玩具となったはるかの受難が始まる

コンクリートの壁に囲まれた薄暗い小部屋
その中に白い裸身が、まるで冷凍肉のように吊り下げられていた……
「……うぅ……」
「やあ目が覚めた？はるかサン」
「くッ」
目の前に立った全裸の少年の陽気な挨拶に顔を歪めるはるか
少年――シンゴに監禁されてから何日が経っただろうか……
飽くことなく繰り返される陵辱に快楽と羞恥に塗れて絶頂と気絶を繰り返し、もう完全に時間の感覚がない……食事の回数で三日以上と判断している程度だ
そして今日も屈辱の一日が始まろうとしていた……

「亜美さんに作ってもらったんですけどね」
シンゴは注射器を取り出しながら笑う
「母乳がでるようにするナノマシン？
なんだそうです…シルバーミレニアム
由来の技術だとか言ってましたね
だけど今みんな普通に母乳が出る
状態なんで、はるかさんで実験
することにしました」

シンゴは、はるかの乳首に注射器
を突き立てると素早く薬液を注入
した。はるかの乳房の中にじわり
と熱い感覚が広がっていき、それ
はやがて疼きへと変わり、乳首が
見た目にもはっきりと膨らんで
痙攣し始める

だが乳首から射精のように母乳が
吹き出すとついにその表情はだら
しなく崩れ乱れた

「仕上げに電気で刺激しておくとおっぱい内部に定着して、いつでも母乳プレイが楽しめる……ということなんで…イキますよ？」
あァッ!!
乳首に電極を繋がれたはるかは、電気を流されるたびに身体を痙攣させ母乳をまき散らし叫び啼く
「そうだ！そのまま電気でイキながら変身してみせてよ！」
無邪気に笑ったシンゴは、はるかの股間に変身スティックを突き挿す
「さあ!!変身しろ！」
「う、うらぬすぷらねっとぱわー!…」
シンゴの命令通りにするしかないはるか
ビリッ
ビリッ
ビリッ
ビリッ
ビリッ

変身時の衝撃で乳首から電極がはじけ飛ぶ
あまりにも敏感になったはるかの性感は
それだけで彼女を絶頂に押し上げた
美しい顔を涙と汗でぐしゃぐしゃに
したはるかは、ぐったりとぶら下が
り荒い息を履き続ける……
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
「まだ始まったばかりだよ
はるかサン……」
シンゴは、そう言うとはるかを
天井から吊り下げていた金具を
外し始めた

「ほらほら、一度イッたくらいでそんな気の抜けたフェラやってちゃダメだよ？」
はるかはシンゴの股間に顔をうずめその肉棒に舌を這わせていたが、シンゴの叱責にも動じず機械的に舌を動かし続ける
「ふうん、まだ抵抗できるんだそれなら……」
「ひぐッ！」
はるかが呻くシンゴの「命令」で自ら乳首をしごかされたちまちのうちにびくりと身を震わせた
ぴちゃ
ぴちゃ
むぎゅっ

「まったく強情ねえ……」
突如はるかの耳に聞き慣れた声が響く
なんとか目だけ動かし先に見えたのは
セーラーネプチューンこと海王みちる
だった……

「みちる！気をつけろ！そいつは！……」シンゴの「命令」に支配される前にと警告を発したはるかだったが……
「まったくダメねえ……」必死なはるかの声など聞こえないようにみちるは、はるかを脇に押しやりシンゴの前に跪いた
「こうやるのよ？はるか」そう言うとみちるは、その端正な唇でシンゴの肉棒を咥え込む
はるかには、目前で起こってることが信じらなかった……

「な、なにをやってるんだ！みちるッ！」
だがはるかの悲痛な叫びなど聞こえないのか
みちるは美しい顔を歪め、下品な音すら立て
シンゴの肉棒を一心不乱にしゃぶり続ける…
じゅっぽ
じゅっぽ

「ぷはっ」はるかにとって悪夢のような時間は、シンゴの肉棒から白濁液が噴きだしたことでようやく終わった……
だがみちるは顔中に白濁液を塗りたくられつつも満足気な表情でため息をついた
「…ふう…どう？はるか…ご奉仕というのは、こうするものなのよ？」

「まったくあなたときたら
頑固で困ったものねえ……」
みちるは普段と変わらない口調で
はるかに話しかけていたが、その
目は一度射精した程度ではまった
く萎えないシンゴの肉棒から離れ
なかった
「ふふふ……さすがシンゴ君
この程度じゃ全然物足りないのね……」

「いい？はるか…愛しあうって
いうのはね、こうやるのよ」
そういうとみちるは、シンゴの
頭を抱き寄せる
シンゴはみちるの乳房にむしゃ
ぶりつき、薄布越しに陥没気味
の乳首を咥えて引きずり出す
「あん！シンゴ君せっかちねえ」
「ふふ…みちるさんこうされる
の好きなくせに」

「もう…ジンゴ実好きなだけでいいわよ」
みちるはジンゴに向かって尻を突き出し
ぷるんと尻肉をかきわけぶたつの穴を開ける

「う~んアナルでいこうかな?」
しげしげとみちるの双穴を眺めていたシンゴが答える
「あ…ごめんなさい…ちょっと待ってもらえるかしら…ん…」
みちるは顔をしかめると肛門から飛び出してきたのは……変身スティックだった
んっ
にゅ
ぐぢゅっぱっ!

「ふふ…シンゴ君に言われてお尻に挿れてたのをすっかり忘れてたわ」
みちるは、いたずらっぽく微笑む
腸汁にまみれた変身スティックがずぶりと抜かれ、みちるの尻穴がぽっかりと口を開けて中の肉襞を外気に晒す……

「ああ……そんなこと言ったっけ？
それじゃ言いつけを守ったご褒美も
兼ねてお尻かな……」
シンゴはそそり勃った肉棒をみちるの
肛門にあてがい一気に突き挿した
んはァッ！
ずぶッ
ぐにゅう

シンゴの極太の肉棒が、みちるの尻に深々と突き挿れられていく

シンゴとみちるでは身長差があるため立ちバックというより、みちるの尻にシンゴが跨ってるような格好になっているが、すでにみちるはだらしなく舌を垂れ恍惚とした表情を浮かべているだけであった……

シンゴの肉棒に尻穴を抉られ、みちるが嬌声をあげる

お♡ほお♡

おお♡!

アア♡!すすごいわ♡

ジュボッ♡

ズボッ♡

「し、シンゴ君！あれ！あれをやって頂戴！」
尻を嬲られながら、みちるがシンゴに何事かを懇願する
ビクン、ビクン
んほおオォ
もうだめぇ!!
アッ!!

「まったく好きだなあ…みちるさんは」
呆れたような返事を返したシンゴだが
腰の動きを一段と激しくするとぶるっと身震いする――射精したのだ
ドクッドクッドクッドクッ
ぶぼッ
だがその射精はそれで終わらなかった
シンゴの身震い、みちるの座攣具合から
夥しい量の精液がみちるに注ぎこまれて
いっているのが、はるかにもわかる
みちるの腹部が段々と膨張していき
もはや妊婦のような有り様である
うごッ
ボコォッ

身体の内部をすべて精液で満たされたかのように膨れ上がったみちるは遂に爆発した

口や鼻からさえも精液を吹き出し周囲に撒き散らす

信じられないことにそんな惨状のなかみちるは快感で絶頂を味わっているようだった……

あがっアァ

ぶばアッ!!

シンゴは肉棒を尻から引き抜くと
みちるから下りた
みちるは姿勢をまったく変えない
まま、精液を吐き出しながら快楽
の余韻に痙攣し続ける
「あぁ…やっぱりスゴイ…これ…」
なかば放心したまま、うっとり
つぶやくみちる……
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
だらぁ

ようやく胃の中の精液を吐きつくした
みちるにシンゴが声をかける
「じゃあ、次は下のほうも出して」
「……仕方ないわねえ」
みちるは少しりきむとシンゴの肉棒
でゆるくなった肛門から噴水のよう
に糞まじりの精液をまき散らした…
狭い部屋の中に新たな異臭が満ち
はるかの鼻孔を刺激する
ブボボボボボボ!!

かなりの量を吐き出したとはいえ、まだ腹がぼってりと膨れたみちるは精液の重さに耐えかねたようにへたりこみゲップすら吐き出す
「みちるッ！一体どうしたっていうんだ！？」
生死すらともにしたパートナーの信じられない痴態を目の当たりにして呆然としていたはるかが、ようやく正気に戻って叫んだ
「…はッ！？もしかしてもうすでに洗脳されて……」
「いいえ……違うわ…はるか……」
胡乱な目つきではるかを横目にみちるが答える

「確かにシンゴ君の力は圧倒的で抗えないわ
でも私が彼に従ってるのは私の意思よ……」
「なんだって!?」
「もう決めたことよ…私は全てをシンゴ君に
委ねることにしたの…あとはあなたをどう
やってこちら側に引き込むかだけが心残り
だったから、彼に頼んであなたを調教する
ことにしたの…実は、今までのはすべて私
のプランだったのよ…」
「な……」
絶句するはるか
パートナーの思いもよらぬ裏切りにどう
反応していいかわからない
「ところがあなたときたら思った以上に頑固
で上手くいきそうになかったから、最後の
手段にでることにしたわ……」

「さあ、はるか一緒に…」
「み、みちる…？」
みちるはゆっくりとだが物凄い力でみちるをねじ伏せる
股間をはるかの股間に押し付け足を無理やりに開かせる
「私達、これから一緒にシンゴ君の子種を授かりましょう…」
「何を言ってるんだ、みちる！」
絶叫するはるかだが覆いかぶさったみちるはビクともしない

あアッ!
あん♡
「さあシンゴ君…いえご主人様私達に子種をくださいませ…」
「や、やめろォッ!」
そんなふたりにシンゴがのしかかり、まずはみちるに挿入する…そして射精…萎える事のないシンゴの肉棒は続けてはるかに挿入し、またも射精
それが延々と繰り返された…妖魔ですらこれほどの精力を維持することは不可能であろうと思われるほどの絶倫ぶりであった……
ブジュッ
ドプッ!
ドプッ
ジュプッ ジュブッ

ピク
あぅぅ…
ピクッ
「どう？はるか…これはもう絶対受精したわよ…ふふ…」
「あ…あぁ……」
子宮いっぱいに精液を注ぎ込まれ溢れでた粘液を股間に感じながらはるかは、もう何を信じていいのかすらわからなくなっていた…
とろぉ
ドロッ

股間から滴り落ちる精液もそのままにみちるは立ち上がるとはるかを見下ろす
「全てをシンゴ君に委ねなさい…はるか
それが私達の幸せなのよ……」
はるかには、その声が悪魔の囁きにしか
聞こえなかった……

あれから半年近くがすぎた――
ふたりは妊娠し、
いまだ地下室暮らしを続けていた

「い、いやだ！
子供なんて産みたくない！」
地下室にはるかの絶叫がこだまする…
腹を膨らませたはるかが天井から吊り
下げられ必死に身を捩り抵抗している
「往生際が悪いわよ、はるか
あまり暴れると破水してしまうわ」
「さあふたりで一緒に子育てしましょう……」
NEXT SLAVE : Pluto